

## ◎第2回土佐清水市史編集委員会の開催について

「秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 風の音にぞ驚かれぬる」…平安前期の勅撰和歌集『古今和歌集』にある有名な和歌です。酷暑が続き、厳しかった夏も移ろい、気が付けば虫の音が聞こえてくる今日この頃です。

さて、「市史編さん便り（第12号）」にて日程調査票をお配りし、各編集委員さんにご提出していただき、調整した結果、下記の日程で第2回編集委員会を開催することとなりました。当初時間帯を15時からとしておりましたが、遠方から来られ、日帰りされる方もおられるので、14時から会議とさせていただきます。出席依頼文書を同封しておりますので、万障お繰り合わせのうえ、ご出席をお願いいたします。

**令和2年10月30日(金)14:00～16:00**

**土佐清水市立中央公民館3階・多目的ホール**

## ◇新たな研究成果による知見を取り入れた「市民のための地域学の基軸書」 となることをめざして…『新・土佐清水市史』執筆は進む！

市史編さん室 田村公利

上下巻合わせて2307頁あった旧『土佐清水市史・上下巻』。資料集としての機能もあり、研究者にとっては便利で活用しやすかったとの高評価であった。

今回の新『土佐清水市史』は、単巻で3分の1に縮小され、720頁となる。コンパクト市史の目指すべきねらいは、「市民のための地域学の基軸書」になること。なによりも市民に傍らに置き、気軽に読んでもらえる一書でありたい。

これまで土佐清水市は「首都圏から最も遠い場所」「僻地」という言葉が先行し、終いには「文化の果つる所」とまで酷評されてきた。このような表現は、旧『土佐清水市史』の中にもある。しかし、本当にそうなのか。私たちは誤解している面が多くある。「僻地」と言うマイナスイメージを刷り込まれているのだ。

市史編集における執筆を通じて感じたことは、「首都圏から最も遠い場所」「僻地」というマイナスイメージは、昨今の陸路中心の交通形態から見た一断面であると感じた。近世以前の海路から見たとき、土佐清水市域は東アジア・東南アジアと京阪神方面をつなぐ海路上の要所との見方もできる。

地震・津波・飢饉・水害・伝染病等々、私たちの先祖である先人は、この土佐清水市に居住し、これらの命に関わる幾多の試練を乗り越えてきた。この先人の命のメッセージが市史であり、私たちは次の100年を目指し、この歴史を未来へと伝承していかなければならない。過去から学び、未来へ希望をつなぐ、これが歴史学習の最大の使命であり、意義であろう。コロナ下の現状の中を私たち土佐清水市民は、「ふるさとへの愛着と誇り」を持って、次の100年を目指し、新たな一步を踏み出さねばならない。

## 最新の研究成果に基づく新たな知見を導入する『新市史』

今回の市史編さんにおいて、研究成果に基づき、新たな知見を市史に導入する箇所が出てきた。以下①～④にその事例を紹介しておきたい。

- ①第1章 考古⇒片粕遺跡から出土した土器は、大坂方面から伝播した土器が含まれていたことが判明した。
- ②第3章 中世⇒平成16～19年度に高知大学教育学部市村研究室が科学研究（市村高男教授）、平成19年度土佐清水市教育委員会（生涯学習課）が国庫補助にて加久見氏城館跡の試掘確認調査を行った。その時の成果を導入し、海運に関わる海の領主「加久見氏」の実態に迫まる。  
⇒これまで長宗我元親が土佐統一を行った「渡川合戦」については、『土佐物語』『元親記』からその状況が『県史』『中村市史』などに書かれてきた。最近、林原美術館と岡山県立博物館の共同研究により、「石谷家文書（いしがいけもんじょ）」と呼ばれる一次史料の存在が発見され、そこに「渡川合戦」の具体的な状況が記述されていた。新史料から解明したことをもとに改訂前の『県史』に先駆けて新『土佐清水市史』は史実の「渡川合戦」を大胆に記述することになる。
- ③第5章 近現代⇒近現代・・・高知大学前人文学部長・吉尾寛教授の研究で足摺半島の松尾・中浜・清水などで大正末から昭和初めにかけて台湾への漁業移民を行った人々の記録も新たに加える。  
⇒奈半利町加領郷の網元・大西源吉所有の第28琵琶丸が昭和25年10月末に神津島近海の暗礁に座礁し遭難した「琵琶丸遭難」についても触れる。乗組員のほとんどが足摺半島西南部・鼻前の出身者だった。
- ④同 和 教育史⇒北代色さんの「夕やけがうつくしい」の手紙は、彼女が識字学級で字を覚え、文字を書き、表現することの喜びを記述した手紙である。この手紙は同和学習のバイブルともいえるべき学習資料である。北代色さんは土佐清水市の出身である。この北代色さんについても『新市史』では取り上げていく予定である。

※①～④の事例の導入は、現時点での構想（予定）であり、字数や新たな内容検討によって、担当編集委員と市史編さん室が協議して変更となる可能性もあります。

## 「市史執筆のブレイクタイム(10)」 鹿島神社大祭

土佐清水市史編集委員 岩井 拓史

### 1. 概要

航海の安全や豊漁を願い、毎年2月と10月の第3日曜日に鹿島神社（土佐清水市旭町一円）で行われる。鹿島神社は、その祭神は武雷槌尊（たけいかずちのみこと）といわれ、本社は鹿島大明神と称し、当地の土産神として尊崇されていた。天正8年（1580）3月に創建されたと伝えられる。元々本社は海浜部に所在していたが、宝永4年（1707）に流失し、その後山ノ内に移され、宝永6年（1709）に地下人たちにより新たな社殿が建立されて現在に至った。大正5年（1916）に天満宮、清水神社も合祀されている

※註。

大祭は、市街地各地区の区長や総代、神輿の担ぎ手、巫女などが集い、県内有数の漁業基地・清水港にふさわしい賑わいと神聖さを有する一大催事である。

### 2. 内容

祭り当日の朝、鹿島神社の本殿に関係者が集まり、飾り付けた3体の神輿に「神移

し」が行われる。神輿は鹿島神社、天満宮、本清水神社のもので、神様が神輿に移ると神輿船に運び込む。神輿船とは2隻の漁船を太い縄で結んだものである。当日1週間前の御籤祭で神官によってクジが引かれ、神輿船となる2隻が選ばれる。神輿を積み込んだ船は漁港へ向かい、そこで神輿を降ろし、街中巡幸が始まる。

街には四方竹を立て注連縄が張られた「御旅所」がいくつもある。御旅所ごとに神輿が鎮座されると儀式が行われ、氏子たちが祈りを捧げる。ここには竹の先に白い御幣が付けられた「廻り竹」が置かれており、神輿がこの竹を3回廻る。

街での巡幸を終えると、最後の御旅所となる漁港岸壁に向かう。ここでは3体の神輿に神棚が飾られ、神官が祝詞を奏上し、巫女が「浦安の舞」を奉納する。担ぎ手たちによる海への賛美歌「舟唄」の披露を終えると、2隻の船に再び神輿が積まれる。ここから「海上渡御」となり、神輿船に20隻程の供船が大漁旗を掲げて列をなし、湾内を3周する。神輿船の舳先には男が立ち、櫂を振り回す「櫂踊り」を行う。

最後に神輿船は鹿島に戻り、船から降ろされた神輿が本殿に戻り、大祭が終了する。

### 3. 意義

本大祭は地域性や産業性、市街地各地区から成り立つ催事としての規模など、いくつもの特徴をもつ。地域がひとつとなって繁栄発展を祈願することに大きな意義があり、その歴史的・民俗的価値は非常に高いといえる。

#### 【参考・引用文献】

高知県歴史辞典編集委員会『高知県歴史辞典』高知市民図書館，1980年

高木啓夫『土佐の祭り』高知新聞社，1992年

高橋秀雄ほか『祭礼行事 高知県』おうふう，1995年

土佐清水ジオパーク推進協議会事務局『AOSABALABO』同，2020年

#### 【註】

※註 宅間一之「鹿島神社」（高知県歴史辞典編集委員会『高知県歴史辞典』高知市民図書館，1980年）

